

# 第1章. 青年期の課題と自己形成

## 1. よく生きることをもつめて

### <人間とは何か>

- ▶ ホモ・サピエンス (賢い人) ……人間という動物につけられた生物学上の“学名”  
博物学者 リンネ が、ラテン語であらゆる生物に名をつけた。  
homo = ヒト、sapiens = 賢い  
→これをキッカケに、いろんな学者たちが、人間の様々な特徴をとりあげて、学名のパロディを作った。
- ▶ ホモ・ファール (工作人) ……フランス哲学者 ベルクソン による  
道具を使って自然に働きかけていく創造的側面から
- ▶ ホモ・ルーデンス (遊技人) ……オランダ歴史学者 ホイジンガ による  
遊びによって文化を創造する、ということから  
その「遊び」の条件  
①. 自由・自発的、②. 非日常、  
③. 限られた空間・時間、④. それ自体が目的である  
→まさにスポーツなどはこれに当てはまる

### <自己と他者との関係>

- ◎ 和辻哲郎 (日本、1889-1960) 著書『人間の学としての倫理学』  
「人間」という漢語は本来「人のあいだ」という意味である
- ◎ アリストテレス (古代ギリシア) ……「人間は ポリスの動物 である」  
ヒトは、集団で社会生活を営んでいるからこそ、他の動物の上に立てる。  
zoon politikon (ゾーオン・ポリティコン、政治的動物)

## 2. 青年期の課題

### <青年期の誕生>

※昔は青年期はなかった。

- ◎ アリエス (仏、歴史学者) ……著書『子どもの誕生』  
中世においては、子供＝「小さなおとな」として早くから仕事に参加
- ・ 第二次性徴 (身体に性的特徴がより強く表れること) を迎えるとまもなく、  
通過儀礼 を経て、「こども」から「おとな」に仲間入りをした。  
↳ イニシエーション (人がある集団に加入するにあたって行われる儀式)

⇓

現代…身分制度の崩壊、職業選択の自由。知識・技術のレベルも高い。  
よって、一人前の大人になるための準備期間が必要＝「青年期」の誕生  
日本では高校進学率9割を越えた1970年代から

## <人生における青年期の意義>

◎ ルソー（仏、1712-78）……著書『エミール』

▶ 第二の誕生 = 第二次性徴を迎えることを表現したことば

「私達はいわば2回この世に生まれる。1回目は存在するために。

2回目は生きるために。はじめは人間に生まれ、次には男性か女性に生まれる。」

◎ ホリングワース（米、1886-1939）…… “心理的離乳” = 親からの自立

◎ レヴィン（独、1890-1947）

▶ マージナル・マン（境界人、周辺人、marginal = 周辺の）

大人と子どもの境界に位置する不安定な存在

大人の中でも子供の中でも周辺にいるしかない

## <青年期のアイデンティティ形成>

※発達心理学 ……人生をいくつかの段階（人生周期、ライフサイクル）に分け、各段階において達成すべき課題（発達課題）がある、と考える。

◎ エリクソン（ユダヤ系ドイツ人→アメリカ、1902-94）

発達段階	発達課題	失敗の状態
乳児期	基本的信頼	不信
幼児期	自律性	恥・疑惑
児童期	自主性	罪悪感
学童期	生産・勤勉性	劣等感
青年期	自我同一性 identity 確立	identity 拡散
成人期	結婚・職場等での親密さ	孤立
壮年期	若い世代を指導する世代性	停滞
老年期	人生を統合する肯定感	絶望

▶ 青年期の発達課題は「アイデンティティ（自我同一性、identity）の確立」

私は他の誰とも違う独自の存在であり（不変性）、

過去・現在をへて将来もずっと私であり続け（連続性）、

他者からもそう認められている、という主体的な感覚のこと

▶ モラトリアム（義務猶予期間）

アイデンティティの確立のために必要な試行錯誤の期間。

そのために大人としての義務を果たすことを猶予されている。

※他の学者たちによる青年期の発達課題

オルポート ……外界の正しい認知と問題解決

ハヴィガースト ……職業選択準備、経済的独立の目安をつける

## ◎ エリクソンによるライフサイクルと発達課題

彼はライフサイクルを8段階に分け、それぞれに発達課題を設定した。

### 1. 乳児期…… 基本的信頼 ⇔ 基本的不信

保護者など自分を世話してくれる人との間で、不安にさいなまれることなく自分が愛されているんだ、という実感を得る時期。そのためスキンシップが重要。

これに失敗すると、自分で自分を愛せないことになり、後の発達に大きな影響を与える。

### 2. 幼児期……自律 ⇔ 恥・疑惑

自分の意思でコントロールすることを覚える。心的な自信が芽生える。

これに失敗すると、自分に対して確信が持てなくなる。

### 3. 児童期（幼児期後半）……自発性 ⇔ 罪悪感

自分で考えて自分で行動することを覚える。好奇心などからいたずらをしたりもする。なので、大人は行動ではなく、その動機を大事にするべきである。

これに失敗すると、やるのはいけないことだ、と罪悪を感じるようになる。

### 4. 学童期（小学生時代）……勤勉性 ⇔ 劣等感

やればできる、ということを経験し、がんばることを覚える時期。なので、大人は「頑張った」ということを大事にすべきである。

これに失敗すると、何をやってダメ、と劣等感を感じるようになる。

### 5. 青年期……自我同一性獲得 ⇔ 自我同一性拡散

私は誰？（Who am I?）という質問に対して、自分は自分である、ということに気づく時期。第2次性徴がきっかけとなる。正確な自己像を発見することによって、自分はこうなりたい、こうである、という自我同一性（アイデンティティ）を獲得する。また、「やりたいこと、そのすべてをやることは出来ない」という全能感の否定も起こる。

ここで獲得したアイデンティティはその後も随時修正されるため、自我同一性の獲得、そしてその維持は、生涯の課題である。

なお、この時期は社会的な様々な義務からまだ逃れることができる時期のため、猶予期間（モラトリアム）とも呼ばれる。

アイデンティティの確立に失敗すると、将来に関する展望が開けないなどの問題が起こる。（自我同一性の拡散）

## 6. 成人期……親密性 ⇔ 孤独

特定の1人と親密に付き合うようになる。それは、異性、同性を問わない。

その時、付き合うもの同士、自我同一性を獲得していなければならない。相手を尊重しあうことを覚える時期でもあるので、相手が自分に合わせてくれないからといって、相手の同一性を消し去ろうとしてはならない。相手の存在そのものを愛する時期である。

これに失敗すると、特定の1人と付き合うことによって、自分をなくすのではないかと不安を覚え、その場から逃げるようになるため、孤独が起きる。

## 7. 壮年期……生殖性 ⇔ 停滞

他者が育つことを助けることができるようになる。それは、自分の子供のみに限らず、部下、後輩などや社会的なものに及ぶ。

これに失敗すると、自分のためだけに力を使うようになるため、停滞が起きる。

## 8. 老年期……統合 ⇔ 絶望

自分の今までの人生を「どんなことがあったとしてもこれでよかった、これしかなかった」と思えるようになる。社会的に成功を収めたからといって、この統合ができるとは限らないし、また、過去に問題があったからといって、統合が出来ないというものでもない。

これに失敗すると、「このままでは死ねない」と、死ぬことに恐怖を感じ、また絶望する。

※「おとなになりたくない若者たち」を表す言葉>

- ・ピーターパン・シンドローム……大人になりたくない男
- ・シンデレラ・コンプレックス……ステキな男性の出現を待ち望む女性の依存的心理
- ・スチューデント・アパシー（学生の無気力）……大学入学で燃え尽きた日本の青年
- ・青い鳥症候群……自分にふさわしい仕事を求める、と称して次々と転職する若者
- ・パラサイト・シングル……いつまでも親に経済的に寄生する独身男女
- ・永遠の少年……大人になりきれない青年（ユング）

→ユング派のフランツの同名の著書で有名に

- ・ニート（NEET）……Not in Employment, Education or Training

「職に就かず、また教育・訓練も受けていない」若者たち

### 3. 自己の探求

#### 1. 青年の心理とパーソナリティ

##### <自我のめざめ>

- ▶ 自我 …… 「自分」を自分で意識したり、「自分」と「自分以外」を区別したり、自分を構成する要素をひとまとめにして1個の「自分」を作り上げたり、自分の感情・行動などをコントロールする、などという心の働き

- ▶ 自我のめざめ …… 自分というものを強く意識すると同時に他者の目を意識する。

↓

- ▶ 劣等感

※コンプレックス …… 不安や恐怖など、マイナスの感情を伴う体験が、心の奥底の無意識に抑圧されて固定化されたもの

学歴コンプレックス、人種コンプレックス etc.

劣等感もその1つで、正しくは「劣等コンプレックス」と呼ぶ

- ◎ アドラー (奥、1870-1937) …… 人間には必ず何らかの劣等感がある。それを克服しようとする力が、行動の原動力となり克服の努力の中で“性格”が形成される。

しつぷうどとう

※疾風怒濤 (Sturm und Drang、シュトゥルム・ウント・ドラング)

18世紀後半のゲーテ「若きヴェルテルの悩み」などを代表作品とする

感情の高まりを尊ぶ文学運動のこと。(⇔啓蒙主義の理性尊重)

→青年期の、理性では抑えきれない感情の高まりや揺れ動きのことを指すように

##### <欲求の構造>

- ◎ マズロー (米、1908-70) …… 欲求階層説

- ・ 欠乏欲求 ……
  - ①. 生理的欲求 (食欲、性欲、睡眠欲など)
  - ②. 安全
  - ③. 所属・愛情
  - ④. 他者からの尊敬、自尊 (セルフ・エスティーム)
- ・ 成長欲求 …… 自己実現への欲求

##### <防衛機制>

- ▶ 欲求不満 (フラストレーション)

- ▶ 葛藤 (コンフリクト) …… 複数の対立する欲求のどれを満たすか決められない状態

↓

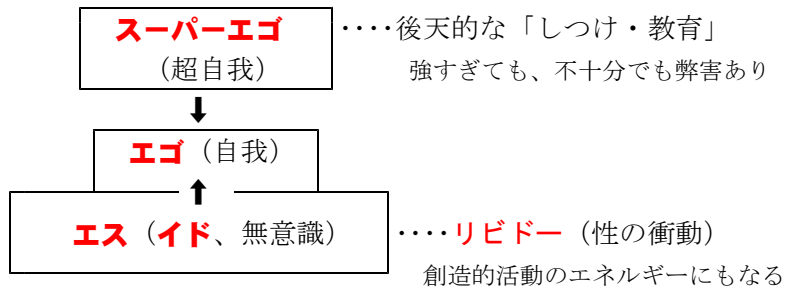
精神的不安定 → 社会的不適応状態

⇓

- ①. 合理的解決……その過程で望ましい個性が形成される
- ②. 近道反応……不適切な衝動的・短絡的行動に走る（→失敗状態）
- ③. 防衛機制……無意識のもの。根本的解決にはならないことに注意。

◎ フロイト（ユダヤ系オーストリア人、1856-1937）  
著書『夢の研究』『精神分析入門』

▶ 無意識 を研究



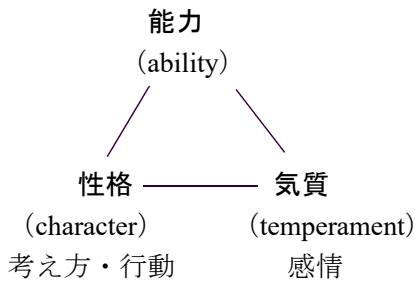
▶ 防衛機制 (defence mechanism)

欲求不満などによる不安・緊張から自我を守る心の無意識のはたらき

抑圧	不安・苦痛のもととなる欲求などを意識の外に閉め出す	
合理化	負け惜しみ・やせ我慢のような、自分の立場の正当化。 ex. イソップ童話「きつねと葡萄」	
同一視	他人の持つ能力・業績・価値を自分が持っているように思いこむ	
投影	自分の中の認めたくない（イヤな）感情・特性を、相手が持っているのだ、と思いこむ	
反動形成	実際とは逆の態度や行動を誇張する。 ex. 嫌いな相手に親切にする。臆病な人が強がる。	
逃避	自分の中に閉じこもり孤立。空想にふける。 神経症を起こして病気に逃げ込む など	
退行	子供の段階に逆戻りして、安全で負担のかからない状態になる。 ex. 弟妹が生まれて親にかまってもらえない子供が甘える、など	
置換	代償	ある欲求が満たされない時に、別のより達成しやすい欲求を満たすこと
	昇華	上記の場合で、逆に、より社会的価値が高い活動にエネルギーを転化して発散させること

<さまざまな性格類型>

※ 個性 (personality、人格) ……下の3つから構成される



※「個性」は欲求の合理的実現や劣等感克服の過程で形成されていく。

・性格の分類

◎ ユング (スイス、1875-1961) …… 内向 型と 外向 型に分類

※無意識も分類……個人的無意識と集団的無意識 (普遍的無意識)  
後者の例:「大いなる母 (Great Mother) などの元型 (プロトタイプ)

◎ シュプランガー (独、1882-1963)

何に人生の価値を置くかで性格を6つに分類

理論型、経済型、審美型、社会型、権力型、宗教型

青年期について:「人間の一生の中で、青年期のように強く理解されたい、と求める時期はない。ただ深い理解によってのみ青年は救われるのだ」

・気質の分類

◎ クレッチマー (独、1888-1964) ……肥満型・やせ型・筋肉型に分類

肥満型	循環気質 (躁うつ気質)	社交的・友好的 現実的
やせ型	分裂気質	非社交的 まじめ、物静か
しまり型 (筋肉型)	粘着気質 (てんかん気質)	几帳面・きれい好き 義理堅い

※ ビッグ・ファイブ ……5つの因子で人の性格を分類

- |                       |    |                     |
|-----------------------|----|---------------------|
| ①. 外向性 (積極的 → 無謀)     | VS | 内向性 (控えめ → 臆病)      |
| ②. 愛着性 (親和的 → 集団埋没)   | VS | 分離性 (自主独立 → 敵意・自閉)  |
| ③. 統制性 (目的合理的 → 仕事中毒) | VS | 自然性 (あるがまま → 無為・怠惰) |
| ④. 情動性 (敏感 → 神経症)     | VS | 非情動性 (情緒安定 → 無感覚)   |
| ⑤. 遊技性 (遊び心 → 逸脱・妄想)  | VS | 現実性 (堅実 → 権威主義)     |

## <道徳性の発達と成熟した人格>

◎ ピアジェ (スイス、1896-1980)

幼児期の他律的道德性 → 自律的道德性

他者から罰せられるか否か

自ら善悪を判断できる

◎ コールバーグ (米、1927-87) ……他律から自律への道徳性の発達を6段階に

青年期……現在の社会的規範を客観的に見つめ、

より普遍的な人間の権利について考えられるようになる

◎ オルポート (米、1897-1967)

成熟した人格についての6つの基準

①. 自己感覚の拡大 (自分の外部へ興味を広げる)

②. 他者との暖かい関係を持つ (親密・共感の能力を持つ)

③. 情緒的安定

④. 現実的知覚と技能

⑤. 自己客観化

⑥. 統一的な人生哲学

## 2. 青年期の間人間関係

### <友人関係>

▶ ヤマアラシのジレンマ

もっと親密になりたいと思いつつも、相手を傷つけることや

自分が傷つくことを恐れて、なかなか適度な距離を見いだせないこと

### <本当の自分とは>

◎ ジェームズ (米、プラグマティズム)

「人は関わりのある人の数だけ社会的自己を持つ」

◎ マルクス 「人間の本質は“社会的諸関係の総体”である」

### <生きることの意味>

◎ フランクル (ユダヤ系オーストリア人の精神科医、1905-97)

ナチスにより強制収容所に送られるが生き延びる。

著書『夜と霧』(原題直訳は「それでも人生に然りと言う」)

… trotzdem Ja zum Leben sagen

「人間は問を発するべきではなくて、むしろ

生命によって問われているものなのであり、生命に答えるべきなのである」

ロゴセラピー (Logotherapy) を創始

人が自らの「生の意味」を見出すことを援助することによる心理療法



## 現代社会の諸問題

### ◆情報化社会

- +) 情報公開 → 民主化
- ) 大衆操作
  - ・ 一方的で大量の情報伝達 (マス・コミュニケーション)
  - ・ 衆愚政治 → ファシズム

大衆 (mass) ……バラバラ、烏合の衆、「孤独な群衆」(リースマン,1950 著)

公衆 (public) ……理性による主体的判断・行動、民主主義の真の担い手

### ◆大衆社会……自由かつ民主主義社会のようであるが、下2つの問題がある。

- ①. 平均化・画一化、個性・主体性の喪失
  - マス・メディアによる一方的な大量情報伝達
  - ハーバマスの指摘する「見せかけの公論」
- ②. 組織の巨大化、官僚制
  - 管理社会 → 人々の無力感、疎外感

### ◎ リースマン (米、1909-2002) ……著書『孤独な群衆』(1950)

社会全体の性格を、歴史の流れにそって3段階に分類

- ・ 伝統志向型……中世以前 = 「変わらないこと」が「良いこと」だった
  - ※伝統主義……「以前からそうだった」という理由だけで、
  - 従来通りの生き方をし、そのことについての価値判断をしない
  - ⇔ 保守主義……価値判断をした上での保守
- ↓
- ・ 内部志向型……近代 (18-19c) = 自己の内面的価値や目標に向かって生きる  
inner-directed
- ↓
- ・ 他人志向型……現代 = 他人の願望・評価を気にして生きる “孤独な群衆”  
other-directed

### ◎アドルノ (独、1903-64、フランクフルト学派)

- ・ 権威主義的パーソナリティ
  - 自由を重荷と感ずるようになった大衆は、権威による束縛を求める。
  - (と同時に、自らより弱い者に対しては抑圧的態度をとる。)
  - 管理社会、ファシズム

### ◎フロム (独、1900-80、フランクフルト学派の心理学者) 著書『自由からの逃走』

◎ マックス・ヴェーバー (独、1864-1920) 著書『官僚制』『支配の社会学』

・ 官僚制 (ビュロクラシー)

国家のみならず、あらゆる社会組織にみられる合理的組織運営のあり方  
そのピラミッド状の組織=ヒエラルヒー (階層制)

- ・ じょういかたつ 上意下達の指揮系統
- ・ 文書主義
- ・ 職務内容は明瞭に区分され専門化

テクノクラート (高級技術官僚) による支配

セクト主義、なわばり主義、事なかれ主義

→ 人間疎外的状況 (組織の歯車としての個人)

◆ 社会集団の分類

クーリー (米)	primary group 一次的集団	secondary group 二次的集団
マッキーバー (米)	community コミュニティ	association アソシエーション
(テニエス) テンニース (独)	Gemeinschaft ゲマインシャフト	Gesellschaft ゲゼルシャフト

↓  
共同体・共同社会  
(地縁・血縁集団)

↓  
機能的集団  
(利益社会)